二

七つ半の刻限になった。

おこんから綿入れを借り受けて着込んだ磐音は、もはや刻限と大川を渡り直して、小梅瓦町に戻ろうと店先に立った。

おこんは武左衛門から譲り受けた仕事を聞くと、寒さ凌ぎに着ていきなさいと、奉公人のために仕立てた袖無しを貸してくれたのだ。

磐音が今津屋を出て三、四歩を行きかけると、

「坂崎様」

と由蔵の声がして、手代を伴った由蔵が立っていた。

「坂崎様、見えておられましたか」

「心配にございましてな」

「ならば、お店にお戻りなされ」

という由蔵に頼まれた仕事のことを話した。

「なにっ、竹村様に頼まれなすったか」

と思案する様子を見せた由蔵は、

「橋際までお見送りしましょうかな」

と言うと磐音と肩を並べた。

「担保の一件ですが、蔵じゅうを目利きが勧請した結果、ざっと五百両になれば上々ということでした」

さすがの磐音も関前藩の貧した状態に返す言葉を失った。

一国の歴代藩主がこれまで買い集めてきた書画骨董刀剣類が、わずかの五百両にしかならないというのだ。

「新しく着任なされた福坂利高様も狼狽なされて、目利きが違うと感情を高ぶられましたが、連れて行った刀剣商と骨董商の、それ以上は、という返事に腰を抜かしておられました」

それはそうであろう。

江戸家老の福坂利高の最初の大事仕事が、藩主一行を無事に国表に出立させることであった。入費がないでは済まされないことだった。

「藩主の実高様にお会いしました。坂崎様のお考えでございますそうな。奥座敷まで同行された中居半蔵様がお洩らしになられました」

「実高様が直接お頼みなさるしか方策は見当たりません。苦衷の末の考えにございます」

「実高様のお人柄、由蔵、感服いたしました。殿様は自らのお持ち物、奥方様の櫛笄、お道具のすべてを集めて待っておられました。これでなんとかしてくぬかなと、この由蔵に頭を下げられましてな、さすがに私も頭が上がりませんでしたよ」

磐音はそこまで覚悟なされた実高と奥方の二人が不憫で瞼が潤んだ。

「老分どの、ご入費、お貸しくださるか」

「はい」

由蔵が明快に返事した。

「ありがたいことです」

磐音は思わず頭を下げた。

「藩の外に出られた坂崎様がこれあｄけご苦労なさっておられるのです。私が出向いた以上、なんとかお力にと考えておりました」

二人はすでに両国橋の袂まで歩いてきていた。

「坂崎様、ですが、今津屋が望んだ担保は、殿様がご用意なされたものではありません」

「なにか関前に残っておりましたか」

「はい、ございました。そのことは、今度、ゆっくりお話しする機会に申し上げましょう。今宵は、ほれ、竹村さんの代役之仕事先へ参りなされ」

「安心しました」

磐音は、今一度由蔵に腰を折って礼を述べると、両国橋を韋駄天走りにかけ出した。

磐音が小梅瓦町に着いたのは、暮れ六つ前だった。

由蔵を待っていたので、夕餉を食する機会を失くしていた。他所のしごとをするのに夕餉を馳走してくれと、さすがにおこんに言いづらかった。今晩は食事抜きにと覚悟して、おとくの住む納屋の戸口に立った。

「おばばどの、これから小屋に詰めます。なんぞありましたら、声をかけてくだされ」

納屋の中から返事はなかった。

だが、煮魚の匂いが板戸越しに漂い流れてきた。

武左衛門は三度三度の食事はくず野菜の塩煮といったが、当人はそういうわけでもないらしい。

磐音がねぐらに定められた小屋に入ると、二畳ほどの広さの板の間の隅に夜具が畳んであった。そして、戸口近くに膳が置かれ、煮魚の切り身と古漬けの沢庵、丼飯に味噌汁が置かれてあった。魚は鯖だ。

「これは美味しそうな」

磐音は思わず唾を飲み込んだ。

夕餉は要らぬと磐音は遠慮したが、夜食にか用意してくれたようだ。

味噌汁の椀からは湯気は立っていた。

「ありがたい」

磐音は膳部と納屋のおとくに合掌した。

まずは包平と脇差を抜き、壁際に置いた。武左衛門が言うように、確かに板壁には隙間がある。だが、袖無しを着込んでいた。

（まずは大丈夫であろう）

磐音は胸の内で呟くと膳に向かった。

溜まり醤油で煮た鯖の切り身もなんとも味付けの塩梅がいい。こうなれば、料理茶屋の膳の前であろうと、隙間風が吹き抜ける小屋であろうと、磐音のとる態度は一緒だ。食べることに没入して、もはやだれかが問いかけても答えない。もっとも小屋の中での一人の食事だ。磐音は、

「古漬けの塩加減がいい」

だの、

「味噌汁がうまい」

だの、独り言をつぶやきながら食事を終えた。

あとは夜具を指揮伸べて寝るしかない。

このところ走り回ってまともに寝る時間もなかったから、床に入るとすぐに眠りに落ちた。

が、ふいに人の気配に目を覚ました。

包平を引き寄せて、小屋の戸の隙間から庭おを覗いた。

夜の帳の折具合だと、夜半を過ぎているようにも思えた。

月光に照らされて、独りの男の影が納屋の裏口へと回った。だが、おとくを襲う様子はなかった。

磐音は、小屋の戸をゆっくりと引き開けた。男とは反対側から納屋回って、裏口に出た。すると格子戸の隙間から明かりが洩れてきて、おとくの声がした。

「文吉、ご苦労だったねえ」

「姉さん、連絡が遅くなりました」

磐音はその問答を聞いて、厠に向かった。

小便をしながら、おとくは決して独りの暮らしを送っているわけではないのだと思った。それにしてもおとくの声は、昼間に交わした会話より張りがあった。

竹村武左衛門がばば様と紹介したので老婆と思ってきたが、年は意外と若いのかもしれない。

そんなことを考えながら小便を終え、小屋に戻って夜具に包まったが、いったん冷えた体は温まらなかった。確かに隙間風も吹き込んで首筋が冷えたかった。どうにか眠りに落ちたと思ったら、すぐに目が覚めた。そんなことを繰り返しているうちに七つの時鐘がとおくから響いてきた。

夜具から起きると綿入れを脱ぎ、袷の帯を締め直した。

そこへ脇差、備前包平を差し込み、小屋の外に出た。

納屋を見たが、どうやら文吉は返った様子に思えた。

磐音は、小屋の前の地面に草履の裏を馴染ませるように擦り付け、右足をわずかに開いて前に出した。

両手の拳を垂らして瞑想に入る。

夜明け前の寒さが磐音を襲ってきた。

だが、呼吸を緩やかにして気を鎮めると、寒さが薄らいだ。

無念無想、脳裏に白い靄が揺蕩て悠久の時が流れていく。

磐音の腰が沈み、右拳が翻って包平二尺七寸を抜き上げたのは、次の瞬間だった。

無音の気合いが励起を斬り裂き、刃がエンコを描いて虚空を斬り割った。

磐音の抜き打ちは、一刻ほど続いた。

淀みなく続けられた動きが緩やかなものとなり、呼吸が元に復した。

井戸端に膳を運んで汚れた器を洗い、ついでに洗面した。

小屋に戻って綿入れを小脇に抱え、白み始めた朝の光に納屋の様子を振り返って確かめ、六間堀の宮戸川へ朝の勤めに向かった。

磐音がいつものように六間湯で朝湯を使い、金兵衛長屋に戻ってみると、木戸口に中居半蔵が立ち、手にひねこびた松の盆栽を持った大家の金兵衛と話していた。

「戻ってこられましたな。そのご様子は遊びというわけではなさそうだ」

金兵衛が言った。

「遊びなものですか。暮れムッtから明け六つまでおばばどのの用心棒を務めて三百文のしごとに励んでおりました」

「なにっ、徹夜いたしてたったの三百文か」

中居が呆れたように言った。

「朋輩が譲ってくれた仕事です。文句も言えませんし、美味しい湯気も付いています」

「それにしても大の男が三百文とは、侍は潰しが利かぬな」

と呻いた。

「中居様、御用ですか」

「昨日のことを報告しておこうと思うてな。昼にはちと早いが飯でも食べぬか」

中居の誘いに頷いたいわねは袖無しをてにしたまま金兵衛に、

「出かけてきます」

と挨拶して、木戸口から引き返した。

磐音が中居半蔵を誘ったのは、六間堀のたいがん、南六間堀町の中橋際にある一膳飯屋だ。

本所深川の運河を往来する船頭や馬方、それに大名家や旗本屋敷の中間たちが飯を食べたい、酒を呑んだりする飯屋で、菜の品数が多く、いつも蜆の味噌汁が火にかかっていて、熱々のものが啜れる。

食事を用意するのが面倒なとき、しばしば利用する飯屋だ。

老爺の義兵衛と嫁のおきちが二人で切り盛りして、客でいつも溢れていた。

「坂崎様、今日はお早いお越しで」

義兵衛が磐音の顔を見て言った。

「宮戸川で朝餉を食べたばかりで、まだ腹はさほどに空いておらぬ」

「なら無理に食べることはありませんよ。今日は、出来立ての草餅がございます。それでも召し上がってはどうですかな」

「いただこう」

磐音と中居は、義兵衛が気を利かして用意してくれた店の奥の席に向かい合って座った。

「中居様は飯を食べられますか」

「そなたが草餅でそれがしだけ飯を食うのおもなんだ、酒を貰おう」

義兵衛に草餅と酒、それに酒菜を頼んだ。

老爺が去るとふいに中居半蔵が座り直して、この通りだと頭を下げた。

「どうなされました、中居様」

「今津屋が参勤下番の入費を調達してくれることになった。これもすべて坂崎、そなたのお陰だ」

「それはちと違います。実高様のお覚悟が由蔵どのの商人心を越えて揺り動かしたのでございましょう」

「聞いたか」

「立ち話にございますので結果だけを」

と、由蔵が伝えてくれた話しを中居に告げた。

頷いた中居は、

「それがしも、いくら篠原三左様が主だった書画骨董を御用金の足しに売り払われたとはいえ、ご文庫に残された総額が五百両にも達せぬと道具屋に告げられたときは、腰が抜けるほどに驚いた」

燗徳利に酒が運ばれてきた。菜は、小岩市と雪花菜の煮付けだった。

おきちが磐音の草餅と茶を運んできた。

「おおっ、これは美味そうだ」

おきちに言うと茶碗を取った。

「利高様が篠原三左様のことを口汚く罵られてな、責任を追及すると激昂なされた」

中居は新任の江戸家老が、初めて見える由蔵たちの前でわれをお失ったことを哀しそうに告げた。

「確かに篠原様は有能な家老ではなかったかもしれぬ。また宍戸はの横行を許した人物であったかもしれぬ。だがな、私利私欲で動かれたことは一度もない。そのことを御直目付のそれがしが一番承知しておる。それを……」

中居は後に続く言葉を呑み込んだ。

「中居様、由蔵どのは、関前はんに担保が見つかったとだけ申されました。それはなんでございますな」

磐音は昨日の疑問を訊いた。

「坂崎、殿と奥方が自らの持ち物を担保に差し出されたことを聞いたな」

「はい」

「それがしは由蔵どのらが戻った後、御用部屋で涙に暮れたぞ。いくら大名諸家が苦労しておるとはいえ、藩主夫妻の身の回りのものまで担保に差し出す藩がどこにある。実高様が恥を忍ばれたことを、われっら藩士一同、恥辱と思わねばならぬ」

磐音はただ首肯した。

「坂崎、担保の一件だがな、由蔵どのと実高様だけが差しで話し合われた場所で決まった事ゆえ、それがしも利高様も承知しておらぬのだ」

磐音は、中居の顔を見た。頷き返した中居は、

「まったくもって推測がつかぬ」

「実高様にお会いになられましたか」

「殿も何も申されぬ。ただ何事かご思案をしておられた」

磐音にも想像の外だった。

「ともかくなんとか体面は保てた」

と答えた中居の口ぶりにはまだ憂色があった。

「今津屋らが戻った後、利高様は殿にだいぶ担保のことを問い質されたようだが、殿は答えられなかったそうな。それを利高様は気にしてな、これでは江戸家老が務まらぬと不満を洩らされたとか」

「利高様のことなれば、今少し江戸藩邸に馴れる時間が必要かと思われます」

「それがしもそう思うのだが、そなたの父上の推挙が未だ判然とせぬ」

と過日のときと同じ考えを洩らした。

「中居様、下番のことにございますが、中居様のも殿に同行なされますか」

「それだ」

と中居が声を張り上げ、すぐに声を潜めて言った。

「ご家老からは、そなたが道中の差配をせよと、命じられておる。だが、近々実高様にお目通りして、江戸に残してもらう所存じゃ」

磐音は頷いた。

「中居様は江戸の物産所立ち上げに欠かせぬ人材にございます。なんとしても今年内に目処を立てねばならぬ火急の策にございます」

「わかっておる。だが……」

と言った中居が再び言葉を呑み込んだ。

「どうなされました」

「それがしの邪推かもしれぬが、利高様は、それがしを始め、江戸藩邸の古手を国許に戻そうとされているのではないかと思うてな」

「それは考えすぎではございませぬか」

「ならばよいが」

中居は杯に残った酒を飲み干して、ぶるりと体を震わせた。

磐音は金兵衛長屋に戻ると一刻余り仮眠を取った。

目覚めて夕餉をどうしたものかと考えていると、戸が開き、幸吉と皿を抱えたおそめが顔を覗かせた。

「昨日さ、馳走になったんで、おそめちゃんのおっ母さんが薩摩芋を蒸かしたからよ、届けに来たぜ」

「ありがたい。夕餉をどういたそうかと考えていたところだ」

磐音は、上がり框まで這いずっていくと、おそめの皿から芋を一つ掴んだ。

「幸吉どのも食べぬか」

「おれは、芋と豆は嫌いだ」

「それがしがいただこう」

磐音は芋を食べ始めた。

「おかしなお侍だぜ。ものを食うときは、まるで腹をすかした赤子だな」

「稲荷寿司はどうであったな」

「美味しかったぜ。奪い合いで食ったぜ」

「おっ母さんの口には入らずか」

「いや、おれの分をおっ母さんに分けたさ。今朝も、稲荷は美味いねえなんてよ、狐の使いみてえなことをなんども言っていたぜ」

「この次は、もそっと量を増やそう」

「ならさ、使いがあるときはいつでも言ってくんな」

そんな二人の会話をおそめは、にこにこと笑って聞いていた。

幸吉とおそめが仲良く返った後、磐音は、おとくの用心棒に行く仕度をした。

その磐音が六間堀の北の橋を通り抜けようとすると鰻の匂いが漂ってきて、鉄五郎親方が顔を覗かせた。

「これから小梅瓦町まで仕事ですかい」

「よくご存じですね」

武左衛門から譲られたしごとのことを鉄五郎にはまだ話していなかった。

「坂崎さんの雇人が鰻を食いに来てさ、根掘り葉掘り、聞いていったんでさ」

「おばばどのがですか」

「坂崎さん、あの女、年寄りに見せているがまだ若いぜ」

鉄五郎親方も磐音と同じ考えを述べた。

「坂崎さんの務めぶりはどうか、剣術の腕前はどうかなどいろいろと聞いてきたんで、差し障りのねえところで答えておきましたぜ」

信頼がおけないと考えたのか。それにしても三百文の用心棒に念が入ったことだ。

「坂崎さん、いったいいくらなんですね、徹夜仕事の用心棒料は」

「夕餉が着いて三百文です」

「呆れたぜ」

と鉄五郎が目玉を剥くと、

「人の命の用心棒に三百文とは、頼むほうも頼むほうだが、請けるほうも請けるほうだぜ。いいですかい、あの女、金には困っちゃいませんよ。酒の飲みっぷり、鰻の食いっぷり、ただのばば様ではありませんぜ」

と鉄五郎が言った。

「仕方ありません」

「怪しげならば早めに打ち切ることですぜ」

と鉄五郎は忠告した。